

ナガサキで「フランス語の道」を歩んだ人 ——フランス語教師、引田稔についての研究報告——

齋藤 一

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災と、その直後に発生した福島第一原発事故をきっかけとして、私はある研究をスタートした。それは、核の時代を生きのびた日本の英米文学研究者、特に広島と長崎でアメリカ軍が投下した原子爆弾による破壊を直接・間接に経験した研究者たちの仕事に注目し、英語圏、特に北米の文化や文学についてどのような文章を書いていたのか、どのようなテキストをどのように研究したのか、その研究に彼ら彼女らの核兵器・実験の経験がどう影響を与えていたのかを調べるといものである。研究の動機はシンプルで、広島・長崎原爆（1945年8月）や第五福竜丸事件（1954年3月）といった出来事に、様々な形で応答した先人たちの営為に学び、巨大な核災害のあとを生きる私自身の文学研究者としての使命を問い直すためである。これまでに、福原麟太郎（1894年～1981年、広島県福山市出身、1945年8月当時は東京在住）、大原三八雄（1905年～1992年、広島市で入市被曝）といった英米文学研究者について研究報告的な文章を執筆し（齋藤〔2014〕）、これから研究すべき研究者たちについての簡潔な紹介文を書くことができた（齋藤〔2017〕）。

この2017年の文章で、私は英文学者の伊東勇太郎（1889年～1980年）についてごく簡単に触れた。伊東は長崎高等商業学校、長崎経済専門学校、そして長崎大学経済学部で長く教鞭をとった教師であるが、英文学者として長崎原爆に応答した人物でもある（伊東については別の機会に詳述する）。この伊東について論文を書くために、私は2018年2月と9月に長崎大学附属図書館中央館と経済学部分館で調査をおこなった。その際、かつて長崎大学が発行していた広報紙『学園だより』の復刻版を読んでいた私は、1943年から1981年まで長崎高等商業学校・長崎大学経済学部で教鞭を執っていたフランス語教師、引田稔（1915年～1987年）の「私の履歴書」（引田〔1979〕）という文

章に目を止めることとなった。「私の履歴書」という連載記事は長崎大学の教職員が自らの半生を振り返るものであり、原爆体験記も少なくない重要資料であるため、私にとって決して読み飛ばすことはできない文章である。とはいえ、私は伊東という英文学者について調べていたのであって、フランス文学者は守備範囲外であり、本来ならば引田の文章も一度丁寧に読んで終わりなのだが、彼の文章には何か惹かれるものがあった。文章の最後にある「ことばの森」という言葉の、特に強調の黒丸に目が止まったからでもある。どうもこの引田というフランス語教師は「ことば」に何かこだわりがあるらしい、それなら少し調べてみようとは私は考えたのである。結論をいえば、調べてみる価値はあった。この論文は、現時点（2018年10月31日）における、引田の業績に関する私の研究報告である。

2. 「たんと」した「フランス語の道」

引田の「私の履歴書」は、長崎に生まれた父が早稲田大学で坪内逍遙に師事、母方の伯父が会津八一である云々という、いわば人文・芸術系エリートとでもいうべき自らの生い立ちの記述から始まるものである。この文章で特に私の目を引いたのは、1943年春に長崎高等商業学校にフランス語教師として赴任してからの記述の、特に最後の部分である。以下に引用するが、議論の便宜を図って重要箇所を下線を引き、番号を付けた。

話は変わるが私は幼年時代、母に連れられて度々野外写生のお伴をした。母に、どうしたら絵が上手になるのかと質問したら、母は即座に、「写生です。一にも二にも写生をすることです。」と答えてくれた。この言葉は私の頭に深く沁み込んだ。仏語の勉強においても私は全く同じように丹念に一語一語を噛みしめ象徴の世界に実地の写生をたゆみなく続けているようなものである。^[1] 原爆が落下した瞬間私は片渕の校舎にいたが、^[2] 終戦の八月十五日私は学徒動員の最後の監督者に当たっていた。飽ノ浦の防空壕（三菱造船所）の中で天皇の放送をきき、全員を無事にまとめ、歩いて稲佐橋を廻り片渕へ帰り着いて整列、報告、そして私の任務と戦争が終わった。^[3] それから再び私のフランス語の道はたんととしてというべきなのか、一日の休息もなくことばの森の中をたどり今日に至っている。^[4]

この文章を読んだ私は以下のように考えた。——下線部 [2] を読む限り、1945年8月9日の米軍による原子爆弾投下の瞬間、引田は爆心地から金比羅山を挟んだ片瀬の校舎にいて、原子爆弾の直撃を受けてはいないため（本論文第5節を参照）、下線部 [3] で1945年8月15日の敗戦の日の学徒動員引率に関するエピソードは書いているものの、爆心地の悲惨な状況などについては語っていない。つまり、引田という人は、下線部 [1] のように、フランス語に対しては「丹念に一語一話を噛みしめ」ながら研究していたのではあるけれども、原子爆弾のこととはひとまず距離をおいて、下線部 [4] によれば「たんたん」と、つまり『広辞苑』第7版（2018年）が示すように「淡淡」と、「あっさりしたさま。執着のないさま。淡白なさま」で「一日の休息もなくことばの森の中をたど」ったのである。そして彼の歩んだ「フランス語の道」は「坦坦」と、つまり（『広辞苑』によれば）「（道路などが）平らなさま」を示していたのであり、その道の上の人生は「変化なく平凡に過ぎ」たのである。そうであるならば、引田は敬意を払うべき勤勉な研究者ではあるが、私はこれ以上この人について調べる必要はないのだろう。——私の推論は正しくなかった。引田はフランス文学研究とフランス語教育という「フランス語の道」を決して「たんたん」と歩いたわけではなかった。そしてその「道」は核の問題にもつながっていたのである。

3. 「引田稔教授 略歴・著作目録」（1982）補足修正版

長崎大学経済学部が発行している紀要論文集である『経営と経済』第61巻4号（1982年）には「引田稔教授 略歴・著作目録」（以下「目録」と省略する）が掲載されているが（221～222）、この論集の全記事は現在「長崎大学学術研究成果レポジトリ」でPDFファイルとして公開されウェブ上で読むことが可能であり、引田の業績について概観するのに非常に便利である。ただしこの「目録」は、当然ながら長崎大学定年退官の1981年から没年の1987年までの著作等については触れていない。また、私が調べた限りでこの目録に漏れている文献もある。そこで、本論文では「略歴・著作目録」の内容やスタイル（元号表記を西暦表記に変更する等）を適宜補足修正したものを以下に示し、現時点での調査結果をもとに補足した業績には★をつけることとする。

【略歴】

- 1915年 9月 長崎市に生まれる
1939年 3月 東京外国語学校仏語科卒業
同年 4月 鉄道省東京鉄道局
1941年 8月 名古屋陸軍幼年学校教授嘱託
1943年 3月 長崎高等商業学校助教授
1951年 3月 長崎大学経済学部講師
1967年 3月 長崎大学経済学部助教授
1975年 12月 長崎大学経済学部教授
1981年 4月 停年により退職
1982年 4月 活水女子大学教授⁽¹⁾ ★
1985年 5月 長崎大学名誉教授⁽²⁾ ★
1987年 1月 死去⁽³⁾ ★

【著書】

- 引田 1953, 『「お菊さん」抄』 第三書房
___ 1956, 『フランス小文典』 第三書房
___ 1974a, 『フランス文学辞典』 (共著) 白水社⁽⁴⁾

【論文】

- ___ 1955, 「ピエール・ロチに於ける文体の發展」, 『経営と経済』 35巻1号 (特輯), 511-530頁
___ 1965, 「ピエール・ロチと小説〈お菊さん〉」, 『経営と経済』 45巻2・3号, 529-558頁
___ 1966, 「「経済基本仏語」の統計的研究」, 『経営と経済』 46巻2号, 295-324頁
___ 1967a, 「ル・モンド紙「経済週報」欄の語彙 (1)」, 『経営と経済』 46巻3・4号, 35-57頁
___ 1967b, 「ル・モンド紙「経済週報」欄の語彙 (2)」, 『経営と経済』 47巻1号, 85-104頁
___ 1967c, 「ル・モンド紙「経済週報」欄の語彙 (3)」, 『経営と経済』 47巻2号, 115-144頁
___ 1973a, 「Le Mondeと文法」, 『経営と経済』 53巻1号, 61-93頁

- ___ 1973b, 「ル・モンドと文法」, 『フランス語フランス文学研究』日本フランス語フランス文学会, 第23号, 102-103頁
- ___ 1974b, 「仏核実験とル・モンド (1)」, 『経営と経済』53巻4号, 85-112頁
- ___ 1974c, 「仏核実験とル・モンド (2)」, 『経営と経済』54巻1号, 41-79頁
- ___ 1975a, 「仏語教育の問題点」, 『経営と経済』55巻1号, 1-28頁
- ___ 1975b, 「日仏基本語の比較」, 『経営と経済』55巻2・3号, 449-467頁
- ___ 1976, 「基本仏文法と語学」, 『経営と経済』55巻4号, 251-273頁
- ___ 1977, 「「ル・モンド」における慣用語句の研究」, 『経営と経済』57巻1号, 77-103頁
- ___ 1982, 「シンガポール——外国語教育と国際交流——」, 『活水論文集』活水女子大学, 第25集, 89-100頁 ★
- ___ 1985, 「ピエール・ロチ再発見」, 『大分大学経済学部論集』大分大学経済学会, 第36巻5号, 16-36頁 ★

【書評】

- ___ 1980, 「関根秀雄著『モンテーニュ逍遥』」, 『経営と経済』60巻3号, 165-172頁

★【その他】

- ___ 1941, アー・アーガル「佛印の水路と沿岸都鄙」引田稔訳及編, 『外国鐵道調査資料』鐵道省業務局, 第15巻7号(168), 25-51頁(翻訳)
- ___ 1963, 「ピエール・ロチ」, 『長崎文化』第9号, 長崎国際文化協会, 15頁(エッセイ)
- ___ 1979, 「私の履歴書」, 『学園だより』第64号, 1979年1月27日, 5頁(『学園だより 縮刷版 No.3 第61号~90号』長崎大学学生部, 1987年, 23頁)(エッセイ)
- ___ 1970, 「追悼」, 『経営と経済』50巻2号, 9-12頁(追悼文)
- ___ 1983, ピエール・ジャカール『深層心理への招待—無意識, 夢, コンプレックス』山田悠紀男・引田稔訳, 思索社, 1983年(翻訳)

4. 「たんたん」としていなかった引田の「フランス語の道」

以上の「目録」で示した引田の著作は、大きく分けると (1) フランスの作家ピエール・ロティ (Pierre Loti, 1850 年～1923 年) に関するもの、そして (2) 経済学部におけるフランス語教育に関するものとなる。

まず (1) のロティ論について概説する。引田 (1953) はロティの長崎滞在とお菊との短い同棲生活に主眼を置いた『お菊さん』 (*Madame Chrysanthème*, 1887 年) の抜粋に語注をつけた教科書である。引田 (1955) はロティの最初の小説、イギリス人士官ロティとトルコ人女性との同棲生活を描いた『アジヤデ』 (*Aziyadé*, 1879 年) における書簡の使い方の稚拙さを指摘しつつも、のちのロティ特有の文体の萌芽を読みとった論文である。引田 (1963) は「ロチと長崎とのつながり」(15) として、諏訪公園内にある記念碑と、長崎で『お菊さん』のモデルとなった女性と同棲することになったロティの母親への手紙からの引用を紹介したエッセイである。引田 (1965) は引田の主要な『お菊さん』論というべき論考であるが、「小説〈お菊さん〉の中には、先進国としての西欧人のあからさまな〔齋藤注：明治初期の日本に対する〕優越感が随所にのぞいている反面、否定しようとしても不可能な東洋の価値ある伝統的な文化風習の特質が次第にロチをとらえ、ロチの心を変えていく推移が読みとられる」(539) ことを評価している。引田 (1974a) は白水社から出版された文学事典の一項目としてロティを紹介したものである。引田 (1985) は、ヨーロッパ人によるロティ『お菊さん』の日本に対する偏見の批判を紹介しつつ、ロティの作品は引き続き読むべきであることを訴えるものである。

こうしてみると、フランス文学研究者としての引田はロティだけを読んでいたかのようにも思えるが、実際はそうではない。江島 (2003) から引用する。

今年〔齋藤注：2002 年〕の 8 月のことですが、或る新聞の片隅にモーパッサンの短編集の新訳が、出たという広告を見付けました。その時に、52 年前にフランス語の先生に教わった二つの短編小説が、載っているかも知れないという予感がしました。早速、本屋に出掛けて、手に取ってみると、果たして、「シモンのパパ (Le Papa de Simon)」と「二人の友 (Deux Amis)」が出ている。途端に昔に習った数々の仏語教材が脳裏に浮かびました。

第二外国語はフランス語を選択しました。担当教師は当時、35 才前後の紳士然とした引田稔先生です。初めの頃は、文法の解説が延々と続き、先生

には悪いがうんざりする。夏休み前になって、やっとのことで短編小説の講読が始まる。それが先程のモーパッサンの作品でした。短編とはいえ、生まれて初めてフランス語で読む小説です。少し大人になったような気がしました。

三年間に6本の教材を教わったと思います。一年目は、先のモーパッサンの作品とボードレールの詩集「悪の華 (Les Fleurs du Mal)」を、二年目は、ドーデの「短編小説集 (Contes Choisis)」とジードの「アリサの日記 (Journal d'Alisa)、狭き門よりの抜粋」を、三年目は、モーパッサンのエッセイ「水の上 (Sur l'eau)」とカミュの「異邦人 (L'Etranger)」を読んだと思います。(22)

上記の引用には第二外国語としてのフランス語の授業で扱うものとしては定番の作品・作家が並んでいるが、このことについて少し奇妙なことがある。今一度「目録」を参照すれば、江島がこれらの作品をおそらく1950年から1952年頃に開講された引田のクラスで学んだ直後の1953年に、引田は教科書版のロティ『お菊さん』を出版し、1955年にはロティ『アジャヤデ』について論文を書いていたことがわかる。つまり、江島が在籍していた前後、引田は間違いなくロティ作品に取り組んでいたのであり、授業で講読するか言及していてもおかしくない。ところが江島の回想にはロティの名前はない。もちろん江島が知らないだけで、実際には引田はロティを授業で講読したのかもしれない。引田からロティの話聞いた元学生の回想記を私が見つけていないだけかもしれない。もう一点、これはより奇妙なことなのだが、少なくとも「目録」をみる限り、江島が列挙した作家について引田は何も論じておらず、ロティのみを繰り返し論じているということである。フランス文学の教育者としての引田は有名作家の作品を「たんたん」と講読したということなのかもしれないが、研究者としては決して「たんたん」としておらず、むしろ不可思議なまでにロティに執着していたというべきであろう。

引田のロティへのこだわりの具体例として、引田(1985)から引用しておきたい。

日本経済の急激な発展が経済摩擦をひき起こし、欧米の日本研究がにわか
に高まった時期に、『誤解——ヨーロッパvs.日本——』という一冊の本が
翻訳出版された(1980年、中央公論社)。原著者はイギリス人 Endymion

Wilkinson氏である。その結論は、正しい国際関係の発展は相互理解の増進によらなければならないということで、度々叫ばれてきた相互理解の重要性を改めて強調するものであるが、ヨーロッパが日本を〈誤解〉するに至ったさまざまな理由の一つがピエール・ロチの小説『お菊さん』であると指摘している。しかしこれは小説『お菊さん』を誤解することになりかねない。この小説の本質を理解する必要がある。実はそのことが正に、新しい国際理解のために重要である。(16)

イギリス人ウィルキンソンによる、フランス人作家ロティの日本に対する偏見の批判に対して、引田は以下のような反論をおこなっている。まず、ウィルキンソンが指摘するように、確かに『お菊さん』には「日本人を軽べつする言葉が次々に登場する」のであり「もちろんそれらは現在では到底受け入れられない」(17)。しかし、「作者ロチは小説『お菊さん』がその題名にもかかわらず主要人物は「お菊さん」ではなく、作品の中心があくまでも日本であり、自らの心の記録であると定義している(序文)」(同上)のであって、その「心の記録」が19世紀のヨーロッパ人による日本に対する偏見をまぬがれていないとしても「不朽の名作を葬り去ることはできないのである」(同上)という。その理由は以下のとおりである。

それらの〔齋藤注：「日本人を軽べつする言葉が次々に登場する」〕場面を通過してもなおかつ全体として豊かな真実の上に組み立てられている文学の世界を正しく理解しないかぎり、真の国際理解は成り立たない。それは不可能である。ロチは1880年代の日本を正確に観察し、記録した。もしそれを誤りとするならば、20世紀においても、またやがて21世紀になろうとするわれわれ自身の記録においてもまたロチと同じような誤解を犯すことになろう。われわれは、互いに、自らの過去を正視しなければならない。その上で相互の真の国際理解を出発させなければならない。(17～18)

引田の議論を再構成してみると次のようになるだろうか。——『お菊さん』は確かにロティの日本への偏見から自由ではない作品である。しかし作家ロティの日本観察の成果であり、彼の異郷に対する「心の記録」(この点が引田をして『お菊さん』を「不朽の名作」と言わせしめている)なのであるから、それを現在の視点から「誤り」だとして「葬り去る」のではなく、むしろ詳細

に読むことで、19世紀のフランス人男性がいかに日本人と日本社会を理解・誤解したのかを把握し、異文化理解の可能性と限界を知ることこそが、「真の国際理解」の出発点になる。——ある作家や作品を読む際に、その時点で問題含みであると判断されても、その問題点を知ることが重要である、だからこそ読み続けるべきなのだ」と強調する引田のロティへの態度を「たんたん」と形容するのは難しいだろう。

次に(2)、すなわち長崎大学経済学部のフランス語教員として経済学部の学生がいかにフランス語を教育するかという問題意識から執筆された論考について概説する。

引田(1953)は初級者向けのフランス文法教科書であり、本論文において特筆すべきものはない。重要なのは1966年から翌年に執筆された一連の論文である。引田(1966)は、この後継続して執筆されていくフランス語教育関連論文の基本形となっているものである。引田は論文冒頭で以下のように述べている。

外国語学習の窮極の目標は無論その外国語をマスターすることであるが、これを学習するもの、また教授するものからみれば、その第一の目標は〈いかに早く、いかに効果的に〉習得し、あるいはさせるかにあることは論をまたない。いわゆる〈基本語〉設定の意図はここにある。(295)

引用最後の「〈基本語〉設定」という文言において引田が念頭においているのは、6067語の〈基本語〉を収録したというG. Vander Beke, *French Word Book* (Macmillan, New York, 1935)と、フランス教育省が1954年に選定した1445語と初級文法事項を収録した*Le français élémentaire* (1er Degré) (すぐに*Le français fondamental*と改称され、1er Degréと2e Degréには1623語が収録された)であった(295～6)が、これを経済学部の学生のフランス語教育のためにアップデートする必要があるという。そのために引田は次のような作業をおこなうと述べている。

フランスの有力紙*Le Monde*の週刊版*Le Monde hebdomadaire* [sic]の経済論説記事、〈経済週報〉(*Bulletin économique de la semaine*)で、その中にいわゆる〈基本仏語〉がどの程度実際に用いられているか、更にはいかなる locutions や expressions が常用されているかを考えに入れながら、主として経

済用語がどのような形で、どの程度の頻度数をもって使用されているかに調査の焦点を当ててみた。しかしこれらの項目についてそのすべてを記述するのは紙数が許さないで、本稿においては、以上の中の〈経済用語を中心とした名詞の頻度数調査〉を課題とし、これをリストによって示した。(297)

このリスト(301～324)は“accord (de Bretton Woods)”から“zone (sous-développées)”が列挙され、さらに“Africain”から“Yougoslavie”まで国名が並んでいる。

引田(1967a)は、引田(1966)のリストからは「除外された一般仏語を名詞、形容詞等の品詞別に順を追って区分整理し、経済用語との関連を常に留意しつつ、その頻度数の調査をまとめ」たものである(35)。その目的は、引田(1966)で調査した「経済用語を取りかこむ他の一般的な単語が質的にまた量的にどのような形で用いられているか、その実体を併せて明かにすることが経済の専門分野に関するフランス語の学習を、より能率的に、より効果的に行うために不可欠の条件であることは論を俟たない」からである(35)。リスト(43～57)は“abandon”に始まり“zéro”に終わる。なお、引田(1967b)は「形容詞篇」(“abondant”から“(expérience) yougoslave”)であり、引田(1967c)は「動詞と副詞篇」(“abaisser”から“voyager”, “abondamment”から“vraiment”)である。

語彙の検討の次は文法の番である。引田(1973a)は次のような文章から始まる。

仏字紙《Le Monde》を読むために必要な文法知識はどの程度のものであるか。特にその政治、経済欄を読むために必要な語学力について考えるため、文法と語彙の両面からLe Monde hebdomadaire所載の代表的な記事、論文を対象として検討してみた。仏字新聞を読み得る程度の語学力とはそもそもいかなる程度の語学力をいうのか。そのような実用段階へ学習者を導くために文法授業はどのような配慮をすることが特に重要であるのか。これがこの論文の課題である。(61)

論文の内容は文中の人称代名詞の位置に学習者の注意を向ける等々の基本的な内容であるため詳述は避ける(なおこの論文の内容の補足になっているのが引田[1973b]である)。特筆すべきことは、この論文でも1966年から1967

年に執筆された、経済学部生のための〈基本語〉論文と同様に、*Le Monde hebdomadaire*を対象としていること、そして「日常生活を中心に役に立つ、実際的な語学とするために、徒らに文法的な知識を羅列した旧式な学習を避け、話ことばを中心に、やさしいフランス語を目指すのはたしかに重要な反省である。しかしその反面、いかにして早く新聞を読む力に到達するかという一層重要な語学の課題を忘れてはならない」(65)という、〈基本語〉関連書論文と同様の、学習効率重視の姿勢が貫かれていることである。

引田(1975a)にも学習効率を重視した「いかにしてフランス語をマスターするか」(6)という一文があるが、この問いかけに対して、引田は語彙の重要性のみではなく「フランス文法、その構造 *la structure* そのもの」(7~8)の重要性を具体例に即して述べている。一例をあげる。

L'industrie américaine devient, chaque jour, un concurrent plus menaçant pour l'Europe, qui a néanmoins réduit considérablement les droits de douane sur les produits américains.

この文章にみるように、*verbe*の後にくるものは状況補語(時, 場所, 手段, 方法, etc.)または目的補語であるからこの定型的な文章構造(発想の形式)を理解しておれば全文の文脈を解くには少しも困難を感じないだろう。しかし《un concurrent... pour l'Europe》における結びつきは、《競争者》が誰と誰の競争であるのか、《私の、彼の、誰々の...競争者》という観念の登場から《pour l'Europe》に結びつくという論理的な思考に慣れていなければいたずらに問題文の中の単語をあれこれと組み合わせることに時間を費やすことになってしまうだろう。(11~12)

「構造」を無視した頓珍漢な直訳を披露したのかもしれない学生に対する教師としての引田の想いがしのばれる文章である。

引田(1975b)は以下のような問題意識から執筆された論文である。

フランス語を聞くことと同時にフランス語を話す上で考えなければならないことは何をわれわれが話すかであり、フランス人がフランス語を話すのではなく日本人であるわれわれがフランス語を用いる状況の中には必然的に日本のことから、日本の文物と日本人の心や生活に関することが登場する。La roseはフランス人にとってはきわめて一般的なことばであるが、日本人にはまず

SAKURAが親しまれているだろう。 *Le Français fondamental* もこの点は充分に意識し、リストには *pomme de terre* を載せているが、地方によっては当然に *igname* を加えることができることを指摘している。(449)

つまり、日本人の初級学習者にとっては *Le français fondamental* の基本語も決して基本ではないのであり、このリストは学習効果を考えるならばアップデートされる必要があるということになる。そのために引田は「日仏基本語の比較という観点から一つの試みとして現行のわが国の小学国語読本に登場する単語のリストを作成」している(450)。この「小学国語読本」とは「石森延男著「小学新国語(1年上より6年上まで)」(450)であるが、この国語教科書で使われている単語に対応する語句で、*Le français fondamental* に採用されている基本語をリストアップしている。例えば「1年上」に対応する基本語リストは“*matin*”から始まり“*son*”で終わっており、「6年上」のリストは“*surnom*”から始まり“*effondrement*”で終わっている(リストはアルファベット順ではなく、おそらく「小学新国語」に出てきた語句の順になっていると思われる)。

引田(1976)は引き続き *Le français fondamental* を活用した論文である。経済学部の学生が「学習を広く速やかに達成させる」ために(251)、*Le français fondamental* に掲載された基本語のみならず基本文法に着目して、その基本文法で実際に新聞を読み解けるかどうかを具体的に検証するものである。ここで論文内容の詳細な紹介はしないが、この論文で興味深いことは、具体例を *Le Monde* ではなく *Le Figaro* と *France-Soir* から選んでいることである。これは、引田はフランスを代表する新聞の一つである『ル・モンド』ばかりではなく、他の新聞雑誌も研究対象にできたということを示している。とはいえ引田の研究対象は『ル・モンド』が中心だったようである。実際、引田(1977)は「効果的な学習の段階のために単語については「基本単語」の設定が困難ではあるが最も重要な課題である。この単語 *vocabulaire* の延長として、《*locution*》をとり上げなければならない」(78~79)と述べ、具体例として1976年8月22・23日付 *Le Monde* を選び、掲載記事を取捨選択して解説している。

以上、フランス文学研究者として、そして経済学部所属のフランス語教師としての引田の業績を概観した。モーパッサンやボードレール、カミュなどを講読しつつもロティにこだわる引田。経済学部の学生がいかに効率よくフランス語を習得できるかを常に考え、そのために基本的なフランス語リストや基本文法事項などのアップデート・作成をおこなう引田。『ル・フィガロ』なども読

める環境にいたものの『ル・モンド』を熱心に読む引田——『ル・モンド』紙はフランスを代表する、日本の大学でも容易に入手できる新聞ではあったことは、この新聞を研究対象にした理由の一つではあるだろうが、こうしてみると、引田は自らの研究対象に「たんたん」と接したわけではなかった人物であり、いわばこだわりを持って「フランス語の道」を歩んだ人だったと結論づけてよいだろう。

5. 『ル・モンド』研究とフランス核実験への態度

前節では引田が歩んだ「フランス語の道」が「たんたん」としたものではなかったことを示したが、引田の「フランス語の道」はフランスの核実験に関する『ル・モンド』の報道を検討することにもつながっていたのであり、それもまた「たんたん」としたものではなかったのである。このことは引田（1974b）と（1974c）を読むことで理解できる。

まず、フランスの核実験についてごく簡単にまとめた文章（『朝日新聞』2009年6月24日、朝刊）を引用しておく。

フランスの民間研究機関「平和と紛争資料研究センター」によると、60～96年にアフリカ・サハラ砂漠にあるアルジェリアのレグーンとインエケル、仏領ポリネシアのムルロア、ファンガタウファ両環礁で計210回の核実験を実施。うちポリネシアでは大気圏内核実験が46回、地下核実験が147回の計193回に及んだ。フランスは98年、包括的核実験禁止条約（CTBT）を批准した。

この36年に及ぶ北アフリカと仏領ポリネシアにおける核実験のうち、引田が目じたのは「1973年、南太平洋ムルロア環礁で行われたフランスの核実験」（引田1974b, 85）であり、それをめぐる「フランス内外の論争」（同上）である。

以下、引田の2つの論文の内容を紹介する。引田（1974b）では『ル・モンド』紙から10本、引田（1974c）では『ル・モンド』紙から17本、さらに「左派的、反政府的色彩の濃い週刊誌レクスプレス*L'Express*」（引田1974c, 42）から9本を選び出した引田は、それぞれを訳出・要約し、フランス核実験に対するフランス国内外の世論のあり方に迫ろうとしている。

ここで引田 (1974b) と (1974c) がどのような内容の記事をリストアップしているのかを概観するために、論文冒頭にある「もくじ」を引用する。まずは引田 (1974b) の 85 頁から引用する。

- I まえがき——国民世論の形成過程——
- II 仏核実験とル・モンド
 - (1) 太平洋におけるフランスの原爆
 - (2) フランスの核実験はわが国に対する侮辱であると豪首相語る
 - (3) a フランスとの外交関係の断絶を考えているとニュージーランドの副首相語る b フランスとオーストラリア間の核紛争
 - (4) ニュージーランド副首相のパリ訪問
 - (5) ムルロアの核実験。労組が仏製品、サービスに対するボイコットを開始した
 - (6) フランス原爆の犠牲者ハーグ法廷
 - (7) ハーグ法廷の裁定下る。核抑止力は何のためか
 - (8) a ハーグ法廷はフランスに対して、太平洋における危険なあらゆる核実験を差し控えるよう要請した b 「仮保全」のオールドナンス

次に引田 (1974c) の 41 頁より引用するが、記事の内容がわかりづらい場合には適宜注をつけた。

- I まえがき⁽⁵⁾
- II ル・モンドの記事および解説を中心として。
 - (1) A 《核降下物》. B 《2 国の孤独》⁽⁶⁾
 - (2) 《実験水域からの外国船の排除》
 - (3) 《教会対軍部の核武装論争》
 - (4) 核実験実施後に——A 社説《心理的失敗》. B 記事. C 《平和と原爆》. D 《原爆と国防》. E 《大統領の決意》. F 《実験場ムルロア附近》.⁽⁷⁾
 - (5) A 《ジョーベール外相の訪ソ》. B 《ボラルディエール将軍の懲戒》
 - (6) 《政治休戦なしのヴァカンス》
 - (7) 《核兵器を持つべきか否か》
 - (8) つづき⁽⁸⁾
- III あとがき

こうして各論文の「もくじ」を見るとわかるが、引田は『ル・モンド』紙の報道記事や論説を熱心に追っているのであり、これは学生のために基本語リストなどを熱心に作成・アップデートし、ロティ作品にこだわる引田の研究対象への執着ぶりの例証になるだろう。

以下、2つの論文から具体例をあげておく。まず引田(1974b)の「(1) 太平洋におけるフランスの原爆」を引用する。

(1) 1973年3月28日付の *Le Monde*, sélection hebdomadaire は《太平洋におけるフランスの原爆》(Bombes françaises dans le Pacifique) と題する記事をその第1面の冒頭に掲げて次のように述べている。(中略)「キャンベラ駐在のフランス大使はオーストラリアのTVを通じて次のように述べた。《(フランスの大気圏内核) 実験はきわめて近い将来もはや必要としなくなるであろう。》／つまり、フランスのプログラムは同大使の言によると、その最終段階に入った。しかしこの予定があと何ヶ月続くのか、あるいは何年続くのかは明らかにすることを避けている。／この言明は世界の、特に太平洋沿岸諸国の新たな核実験の接近に対する抗議を鎮めるには不十分である。少くも、大使の言葉は、善意の抗議に対しては安心させることが必要となっていることを示している。(中略) オーストラリア、ニュージーランド両国の世論、新聞等は両国の政府が労働党によって、とって代わられたため一層強く核爆発に反対し、外交手段による抗議、デモ、仏製品や船舶に対するボイコット、実験海域への艦艇派遣、国際司法裁判所への提訴等、あらゆる手段を用いてフランスのプログラムを阻もうとしている。(中略) そこでわれわれは次のように考えたい。／フランス政府はそのプログラムの限界を世界の与論に対してもっとよく知らせるのが得策ではないのかと。」(中略) (次第に高まる太平洋沿岸諸国、特に実験地に近いオーストラリア、ニュージーランドの反対の世論が、新聞を動かした。そして新聞が政治を動かし始める。)(95-97)

この記事は、核実験を実施するフランスと、その実験によって影響を被るオーストラリアとニュージーランドとの国家間の対立を伝えるものだが、引田はフランス国内の意見対立を伝える記事も紹介している。引田(1974c)の「(3) 《教会対軍部の核武装論争》」を引用する。

(3) 1973年7月18日付ル・モンドに《教会対軍部の核武装論争》Une

contreverse oppose Mgr Riobé et l'amiral Joybert à propos de l'armement nucléaire de la Franceの表題の下に、はからずも捲き起こった教会と軍部の間の大論戦の様子が伝えられた。(中略) ル・モンドの記事によると、オルレ안의司教 [齋藤注: Mgr Riobé] がフランスは核武装を止めるべきだと公表したことに対して、海軍参謀総長が教会の軍事問題に対する介入の態度を批判した。これに対して、同司教は、国営TVを通じて反論し、《この問題は今日の世界における教会の存在と意義にかかわる全体的な、深刻な問題である。自分がこの問題を取り上げたのはオルレアンという一地方にもかかわりがあり、自分はこの地の人々の考えと共通の心を通わせているからだし、また太平洋に今いる一人は私と個人的にも結ばれているからである。最近、フランスの司教団は軍備問題についてきわめて徹底した研究を行い発表した。それを提督にも見てもらいたいものである》と述べた。かくて、事態は、世俗と精神界との関係において教会が干与すべきか、すべからざるかのより一般的な問題にまで発展することになった (49-50)。

以上の2つの引用は、フランス国内外の意見の対立についての興味深い事例紹介だといえるだろう。

ここで注目したいことがある。引田の論文は、1973年のムルロア環礁における核実験に関するフランス国内外の賛否両論をただ単に紹介しているだけではないということだ。以下は引田 (1974b) の「まえがき」からの引用である。

新聞の紙上に展開する核実験に関する賛否両論の論争の中に、かくて、われわれはフランス人の現代思想の特徴を見出すことができる。世界の現状は今いかなる理念によって導かれているのか。平和とか、共存とか、独立という理念の実体をフランスはいかに受け取っているのか。それをフランスは自国の核実験といかに結びつけて考えようとしているのか。こうした疑問に最も良く答えてくれるものの一つは明らかに新聞の紙面であり、フランスの有力紙が世界の与論に対して及ぼす影響力は決して少なくはない。特に、アメリカと並んで、むしろそれ以上に深く広い文化的な伝統的な影響を日本に投影しているヨーロッパ的な発想は、今日では目覚ましいマス・メディアの発達に伴って、瞬時のうちにも、日本の有力な新聞の媒介によって日本人の精神構造の中に根を下ろしつつある。パリで展開される紙上の論戦はそのままTokyoでの深い反省に繋がるとしても、今日ではそれは少しも不思議ではな

いし、不自然ではない。フランスの核実験は是なのか、否なのか。核の傘の下にあるものが、核そのものの論議を無条件に否定するということは論理的な矛盾以外の何ものでもないであろう。われわれは核の実験を望まない。何故なら、われわれは戦争を望まないのであるから。われわれが核戦争に反対するのは、われわれの真底の心からなる平和への祈りである。(89)

この引用に関しては、まずは引田が核実験・核戦争反対の姿勢を明確に打ち出していることに注目したい。この論文は研究論文であると同時に時事問題に対する政治的アピールなのでもある。

引田が「核の実験を望ま」ず「核戦争に反対」し、「平和への祈り」を願うのは、彼の経歴を考えれば当然ともいえる。上述の引田(1979)には「原爆が落下した瞬間私は片淵の校舎にいた」としか書かれていないが、「片淵の校舎」にいたのであれば引田は長崎原爆の威力を目の当たりにしているはずなのである。ここで、当時の長崎経済専門学校(戦時中に長崎高等商業学校から改名された)、現在の長崎大学経済学部における原爆被害についての事実を確認しておこう。この「片淵の校舎」と爆心地との距離は約3kmで、この間には金比羅山(標高366m)がある。そのため、爆心地より600~800mの距離にあったために「壊滅状態となり、角尾学長以下教職員、看護婦、学生あわせて890余名という多数の犠牲者を出した」⁽⁹⁾長崎医科大学と同附属医院と比べて、長崎高等商業学校(当時は長崎経済専門学校)の被害は軽微だったとされる。しかし河野(1975)によれば「当時校舎が中破の程度で助かったのも、金比羅山の蔭にあったからだ」と云われていたが、それでも屋根や講堂等、相当な被害であった(331)という。また三菱兵器製作所大橋工場(現在の長崎大学文教キャンパス)における学徒動員で、引田の職場からは「原爆により教官1名、生徒26名」⁽¹⁰⁾の犠牲者がでていた。引田がこれらのことを知らないとはまず考えられない。引田自身はこうしたことを論文中で明確に書いてはいないが、原子爆弾による被害の記憶が引田(1974b)と引田(1974c)の背後にある可能性は排除できないだろう。

もう一点、この引田(1974b)の「まえがき」からの引用には注目すべきポイントがある。それは、引田が核実験に関する世論形成におけるメディアの力を重視していることである。もちろん、「アメリカと並んで、むしろそれ以上に深く広い文化的な伝統的な影響を日本に投影しているヨーロッパ的な発想は、今日では目覚ましいマス・メディアの発達に伴って、瞬時のうちにも、日

本の有力な新聞の媒介によって日本人の精神構造の中に根を下ろしつつある」ため、「パリで展開される紙上の論戦はそのままTokyoでの深い反省に繋がる」という論述は、学術的な裏付けがあるものではなく、そのまま鵜呑みにするわけにはいかない。それでも、引田が『ル・モンド』のようなフランスの有力メディアが世界の世論に影響を持っていること、そのメディアがフランスの核実験についてのフランス内外の賛否両論を伝えていることが、やがて「Tokyoでの深い反省に繋がる」と書いていることは見逃せない。ここで引田(1974b)「(1) 太平洋におけるフランスの原爆」からの引用の最後、引田がカッコ内に書いた記述を再び引用しておこう。「次第に高まる太平洋沿岸諸国、特に実験地に近いオーストラリア、ニュージーランドの反対の世論が、新聞を動かした。そして新聞が政治を動かし始める」(97)。引田が核実験反対の世論形成におけるメディアの役割を積極的に評価しようとしていることそれ自体は否定できないだろう。

引田は1973年のムルロア環礁におけるフランスの核実験に関する『ル・モンド』の記事を「たんたん」とリストアップして紹介したのではなく、フランス国内外における賛否両論を『ル・モンド』のような有力メディアが報道していることが反核実験の世論を後押しすることを信じつつ、そしておそらくは自らの作業もその世論形成に役立つことを信じつつ、論文を執筆したのではないだろうか。

6. 結 論

以上、引田の「たんたん」としてはいなかった「フランス語の道」について概説したが、特に第5節で取り上げた2本の論文について、今後も検討すべき課題をあげておきたい。それは、引田が核実験について触れた論文は1974年に執筆された2本のみであり、しかもそのどちらも1973年のムルロア環礁での核実験だけを対象にしていたということである。上述したようにフランスの核実験はすでに1960年から北アフリカで実施されていたのであり、「核の実験を望まない」「われわれ」(引田1974b, 89)の一人である引田であれば、1973年のムルロア環礁における核実験を扱った1974年の2論文以外にも論文を書いてもおかしくないと思われるのだが、実際はそうではないのである。

一つ注目しておきたいのは、引田(1974b)の93頁にある記述である。そ

れは、一人の反核実験の抗議の声は小さいかもしれないが、それはやがて（おそらくはメディアの力もあって）大きくなるのであり、「抗議し、反対する声は遂には、ベトナム戦争がそうであったように、強大国の強大な軍事力をも抑止する強大な力にさえ発展するだろう」というものである。ここで引田がベトナム戦争について触れていることは重要だろう。周知のとおり、1973年1月にはパリ和平協定が締結され、ニクソン米大統領（当時）はアメリカ軍のベトナムからの全面撤退を宣言したが、その背景には戦況の悪化、北ベトナムを支援していた中国とアメリカとの接近、そしてアメリカ国内外における反対運動があった。ベトナムからのアメリカ軍の撤退における世論の役割に力を得た引田が、同じ年に問題となったフランスの核実験の中止を願って論文を書いたのではないかと考えるのはそれほど的外れではないとも思われる。しかし現時点ではこれは推測でしかない。引田が核実験や核戦争反対のメッセージを込めた論文を1974年にのみ執筆した理由については、当時のフランス核実験に対する賛否両論を日本のフランス語・文学研究者がどのように受け止めていたのかといった文脈の検討なども含めて、あらためて論じることとしたい。

注

- ※ 本論文は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（一般）「長崎原爆に応答した英米文学者に関する基礎的研究」（代表：齋藤一，課題番号18K00406）の成果の一部である。
- 1. 1949年から1982年4月まで嘱託・非常勤講師として同大学に出講していた（齋藤の調査による）。
- 2. 「名誉教授の称号授与」（1985年7月5日付『学園だより』第89号，3頁〔『学園だより 縮刷版 No.3 第61号～90号』長崎大学学生部，1987年，189頁〕）による。
- 3. 「敬弔」（『瓊林』70号，1987年，85頁）や久保1987による。なお、『瓊林』は公益社団法人瓊林会が編集・発行する，長崎高等商業学校・長崎経済専門学校・長崎大学経済学部の卒業生のための同窓会誌である。
- 4. 「ロチ」の項目（867）を執筆。
- 5. 『レクスプレス』誌の記事は主にここで取り上げられている。
- 6. 「2国」とは，フランスと，内陸で核実験を行った中華人民共和国のこと。
- 7. Bは引田1974cによれば「《小規模の核爆発。内外の抗議にも拘らず9月末までムルロア実験は継続されるだろう。》」（55-56）という記事。Dは「前国防相ミシェル・ドブレ氏の核武装必要論」（58）。
- 8. (7) と (8) は1973年8月29日付『ル・モンド』に掲載された「アンドレ・フォンテーヌ主筆の署名を入れた解説」（64）で，引田によればこの長文の解説記事

は「核論争に対する総括ともいうべき見解」だという(同上)。

9. 「長崎大学医学部医学科 医学科について 沿革」(<http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/med/introduction/enkaku.html> [2018年10月28日最終閲覧])による。
10. 『長崎大学経済学部 創立110周年記念誌』(瓊林会, 2015年), 151頁。

主要参考文献

- ※ 引田関連の文献データは本論文第3節で示したので、ここでは割愛する。また、注で示した文献についても省略する。
- 江島正信, 2003年, 「引田先生に教わった仏語教材」, 『瓊林』102号, 22~23頁
- 久保幸康, 1987年, 「引田稔先生を偲んで」, 『瓊林』71号, 69頁
- 河野吉男, 1975年, 「原爆落下前後の学園」, 『長崎高等商業学校 長崎大学経済学部 70年史』瓊林会, 325~335頁
- 齋藤一, 2014年, 「福原麟太郎・広島・原子爆弾——研究経過報告」, 遠藤不比人編著『日本表象の地政学——海洋・原爆・冷戦・ポップカルチャー』彩流社, 79~108頁
- _____, 2017年, 「英米文学者と核時代」, 川口隆行編著『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社, 138-142頁
- 「キーワード〈フランスの核実験〉」, 「(世界発 2009) 裁かれる仏核実験 ポリネシアで初の被曝訴訟」, 『朝日新聞』2009年6月24日付朝刊, 2面。